

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：22604  
研究種目：基盤研究(B)（一般）  
研究期間：2019～2022  
課題番号：19H01757  
研究課題名（和文）社会情動的スキルと認知的スキルの相互影響メカニズム：幼児期から児童期の縦断的検討

研究課題名（英文）The interactional process between sociability and cognitive skills: A longitudinal study from preschool to adolescence

研究代表者  
酒井 厚（Sakai, Atsushi）  
東京都立大学・人文科学研究科・教授

研究者番号：70345693  
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、幼児期から児童期を通じての社会情動的スキルと認知的スキル（知的コンピテンスを含む）との相互影響メカニズムを、約600家庭の縦断データを用いて検討した。主な結果として、先行する社会情動的スキルの高さが後の知的コンピテンスの高さに影響を与えること、記憶や実行機能の高さが小学校低学年では社会情動的スキルの低さに、高学年では高さに有意に関わることが示された。認知的スキルと社会情動的スキルの児童期を通じての適応的な発達プロセスについて議論された。

#### 研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、先行研究が幼児期から児童期前期における社会情動的スキルと認知的スキルとの関連を見ていたのに対し、児童期後期までを含めた縦断データを用いて検討したことで、両者の影響関係を従来とは異なる方向性も含めて示すことができた。また、横断的な検討ではあるが、記憶や実行機能という認知的スキルと社会情動的スキルとの間に、小学校低学年では負の関連があるのに対して高学年では正に関わる違いを報告し、認知的スキルの高さが必ずしも円滑な対人関係に関わるわけではなく、児童期を通じて認知的スキルを対人関係場面で活用する経験を積むことの重要性を示唆した。

研究成果の概要（英文）：This study investigated the reciprocal relationships between social and emotional skills and cognitive skills from preschool to childhood using about 600 longitudinal data of Japanese families. The main results revealed that (a) children's positive social and emotional skills significantly predicted later their better scholastic competence during childhood, and (b) children's memory or executive functions were significantly negatively correlated with their social and emotional skills in early childhood but positively correlated with them in late childhood. These findings were discussed in terms of the process of positive development of these skills during childhood.

研究分野：発達心理学

キーワード：社会情動的スキル 認知的スキル 縦断研究 児童期 仲間関係

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

従来、経済的な裕福さ、身体的な健康、人生の満足度など個人の社会的適応を規定する要因としては、知的能力などで表される認知的スキルが目目されてきた。一方、近年では思春期以前の社会性の高さや問題行動(多動・不注意や不安など)の低さが、青年期後期の成績や学歴の高さ、犯罪歴の低さを予測するという報告(Cunha & Heckman, 2008; OECD, 2015; Reynolds et al., 2010)がなされている。OECD(2015)によれば、認知的スキルとは、処理速度や記憶、獲得された知識を基に解釈し外挿する能力のことである。それと対を成す社会情動的スキルは、他者との協働(社交性や思いやり)、目標の達成(忍耐力や自己制御)、情動の制御(自尊心や自信)の3つの要因から構成される。これまで、この2つのスキルは相互に関わり合いながら発達すると仮定され、幼児期から児童期前期においては先行する社会情動的スキルが後の認知的スキルの土台になることが報告されてきた(Smithers et al., 2017)。しかし、児童期後期も含めての同様な検討は行われておらず、両スキルがどのように関わるかの情報がミッシングリンクとなっている。また、両スキルが相互に影響し合う発達の過程には、家庭の社会経済状況や養育態度、園・学校での生活、地域活動などの環境が介在することが予想されるが(Burchinal et al., 2002など)、これら要因の関連も含めたメカニズムは示されていない。児童期は、社会性ととも、学力の基礎を形成し学習への意欲・態度(西村・櫻井, 2013)を育む時期であり、社会情動的スキルと認知的スキルの両者が相互に発達し合うメカニズムを探索し、それが子どもの社会的適応にどのように関わるかを解明することが極めて重要である。

### 2. 研究の目的

本研究では、発達心理学、発達精神病理学、教育方法学の学際的な観点から、将来的な社会的適応や不適応につながる重要な時期と考えられる幼児期から児童期を通じて、社会情動的スキルと認知的スキルの相互影響的な発達に注目し、両者の発達に介在する関連要因も含めたメカニズムを実証的に検討する。具体的には、対象児が3歳の時点から毎年実施している社会情動的スキルの発達に関する調査に登録された2つの縦断コホートを対象に4年間の継続調査を実施し、社会情動的スキルと認知的スキルの相互影響的な発達メカニズムについて、関連要因(家庭の社会経済状況や対象児の個人的特性、生態学的環境)も含めて検討し、子どもの社会的適応との関連を検討する。

### 3. 研究の方法

(1) 対象者：本研究の対象者は、2009年から2014年にかけて、関東甲信越、関西地域、富山と熊本の各県における子育て支援サークルや子育て支援センター、保育園において調査協力に同意した約600家庭であった。対象者は、2019年4月時点で小学2年生から5年生であった児童コホート(約300家庭)、3歳児から年長児のいる幼児コホートの2つの集団で構成された。

(2) 調査内容：対象者へは、毎年1-3月にかけて、年に1度の郵送法による質問紙調査を実施した。調査内容は、下記に示す社会情動的スキルや関連要因ならびに社会的適応についての項目群であった。質問紙調査については、母親と父親に回答を求め、小学3年生からは子ども本人にも回答を依頼した。本報告では、2021年度調査時点において6歳を通過した約400家庭、小学1年生を通過した約330家庭、小学3年生を通過した約180家庭、小学6年生を通過した約130家庭のデータを対象に解析した。また、対象児が小学1-2年生、4-5年生、6年生になった時点で、認知的スキルを測定するためのオンライン実施調査への参加を募集し、承諾した家庭に実施した。この調査は対面での実施を予定していたが、コロナ禍となりそれが難しくなった。そのため、対象家庭に調査用具一式とノート型のパソコンを送付してzoomでコミュニケーションを取り、

保護者にご協力頂きながら以下の認知的スキルを測定する方法に変更した。本報告で使用する2021年度調査終了時点での参加者は、小学1・2年生の対象児家庭が約60、4・5年生では約40、6年生では約60であった。認知的スキル調査の内容も以下に示す。

< 質問紙調査の内容 >

対象児の属性と家庭の社会経済的状況：子どもの性別、月齢、双生児では卵性、家族構成、年収、就労の有無、親の学歴・職歴など　子どもの周囲にある生態学的環境：親の子どもへの愛着・信頼感および養育態度、家族の凝集性、子どものピア・マネージメント、家庭外での子どもの生活環境（園・学校での通学状況、子どもの仲間数、近隣の子育て関連施設など）、地域環境（家庭―園・学校―地域間の連携、地域のソーシャル・キャピタル、家庭による地域コミュニティへの参加の程度など）、親の子育てストレスとソーシャルサポート・ネットワーク、親の抑うつ傾向、親のパーソナリティ（外向性や自尊感情など）など　対象児のパーソナリティ　対象児の社会情動的スキル：向社会的行動と仲間関係の問題（Strengths & Difficulties Questionnaire：SDQ; Goodman, 1997, Sugawara et al., 2006）、仲間コンピテンス（Self-perception profile：SPP; Harter, 1985, 眞榮城他, 2007）、共感・協調性、重要な他者や他者一般への信頼、問題行動など　知的コンピテンス（SPP）　社会的適応：全体的自己価値感（SPP）、成績

< オンライン実施調査の内容 >

対象児の認知的スキル:全般的知的能力(レーブン色彩マトリックス検査; Raven et al., 1990) 記憶と実行機能 (Rey-Osterrieth 複雑図形; Osterrieth, 1944) 創造力 (Unusual use test; Guilford, 1958) 読み書き・計算能力、読解力など知識を基にした応用思考力　母親の全般的知能(WCST-KFS)

#### 4. 研究成果

今回は、主な結果として、まず質問紙調査により収集した就学前後から小学6年生までの縦断データを使用し、社会情動的スキルと、認知的スキルとの相対的に強い関連が予想される知的コンピテンスの相互影響関係について検討した内容を報告する。また、オンライン実施調査で測定した認知的スキルのうち、Rey-Osterrieth 複雑図形により評価した記憶や実行機能に注目し、それが各時点の社会情動的スキルや知的コンピテンスとどう関連するかを調べた結果を報告する。

##### (1) 社会情動的スキルと知的コンピテンスの相互影響関係

6歳から小6時点までの縦断データを用いて、社会情動的スキルと認知的スキルを含む状態像である知的コンピテンスとの相互影響関係について、両スキルとの関連が予想される親の養育態度も加えて検討を行った。使用した尺度は、社会情動的スキルについては、上述のSDQ(2:あてはまる~0あてはまらないの3件法、各因子5項目)における「向社会的な行動」と「仲間関係の問題」の2つの下位尺度、SPP(4:あてはまる/はい~1:あてはまらない/いいえの4件法、各因子6項目)の「仲間コンピテンス」尺度を用いて測定し、「知的コンピテンス」もSPPの下位尺度を使用した。親の養育態度は、Shumow et al. (1998)が作成した Raising Children Checklist を邦訳し、「権威的養育」因子の4項目(4:全くそのとおりだ~1:全くちがうまでの4件法)を合算して使用した。いずれの尺度も信頼性と妥当性が認められた尺度の邦訳版であった。小学3年生と6年生のSPPについては子ども本人が回答し、他の調査項目には母親が回答した。

時間の経過に伴い、社会情動的スキルが知的コンピテンスや権威的養育とどのように影響し合うかを検討するため、社会情動的スキルの変数ごとに、共分散構造分析によるパス解析を実施した。解析はAmos Ver.27を用いて、124名分のデータを欠損値を推定して使用し、先行するすべての変数が次の時点のすべての変数を予測すると仮定した交差遅延効果モデルにより行った。

なお、各解析では、子どもの性別と気質（行動の抑制制御） 母親の学歴を統制変数として使用した。図 1 は、向社会的な行動との相互影響性について検討した結果であり、5%未満の水準で有意なパスが示されている（以下、同様）。モデルの適合度は十分であり（ $\chi^2(16) = 17.850, p = .333, CFI = .997, RMSEA = .031$ ） 6歳時点の知的コンピテンスの高さが小1時点の向社会的な行動の高さを予測し、それが後の時点の高さに継続してつながることが示された。また、小1時点の向社会的な行動は小3時点の親の権威的養育（親が権威ある存在としてありながら子どもの自律性を促して関わるポジティブな態度）の高さを予測し、それが小6時点の向社会的な行動の予測につながるパスも得られた。図 2 は、仲間コンピテンス（仲間と良好な関係を築くスキル・能力）との相互影響性について検討した結果である。モデルの適合度は十分であり（ $\chi^2(9) = 9.723, p = .373, CFI = .999, RMSEA = .026$ ） 小3時点の知的コンピテンスの高さが小6時点の仲間コンピテンスの高さを予測していた。また、小1と小3時点の仲間コンピテンスの高さが次の時点の権威的養育の高さを有意に予測していた。図 3 は、社会情動的スキルのネガティブな状態像である仲間関係の問題との関連から検討した結果である。モデルの適合度は十分であり（ $\chi^2(11) = 13.849, p = .241, CFI = .995, RMSEA = .046$ ） 6歳時点の仲間関係の問題の高さが小1時点の知的コンピテンスの低さを予測していた。また、小1時点の仲間関係の問題が小3時点の親の権威的養育（親が権威ある存在としてありながら子どもの自律性を促して関わるポジティブな態度）の低さを予測し、それが小6時点の向社会的な行動の低さを予測するパスが示された。

これらの結果から、社会情動的スキルがポジティブな内容の場合には、知的コンピテンスが後の社会情動的スキルを高める影響があり、一方で、社会情動的スキルがネガティブな内容の場合には、その高さが知的コンピテンスを低める影響があることが示唆される。先行研究（Smithers et al., 2017）では、幼児期から児童期前期には先行する社会情動的スキルが後の認知的スキルに影響する方向性を認めてきた。しかし、本研究の結果からは、就学移行期においても児童期後期においても反対の影響方向が見られる可能性があること、また社会情動的スキルの質がポジティブかネガティブかによっても両スキル間の影響の方向性は異なる可能性があることが考えられる。また、小学校低学年の社会情動的スキルは後の親の養育に影響を与えており、向社会的な行動では権威的養育を高めてその高さがまた向社会的行動を高める好循環が、仲間関係の問題では権威的養育の低めてその低さが後の仲間関係の問題の高さにつながる悪循環が示されている。今回は、知的コンピテンスと権威的養育との直接的な関連は見られなかったが、両スキルの相互影響性に養育態度などの環境要因がどのように関連するかは今後さらなる検討が必要である。

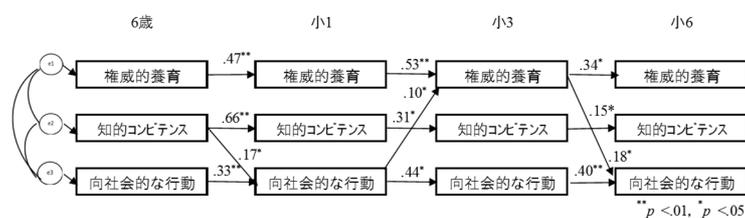


図 1 向社会的な行動と知的コンピテンスおよび権威的養育との相互影響関係

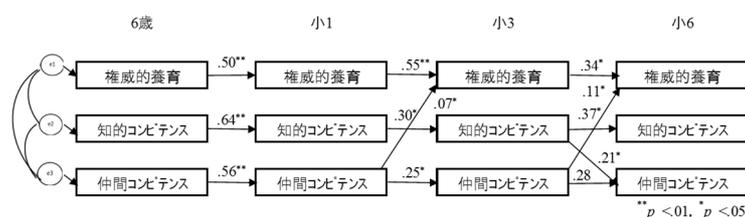


図 2 仲間コンピテンスと知的コンピテンスおよび権威的養育との相互影響関係

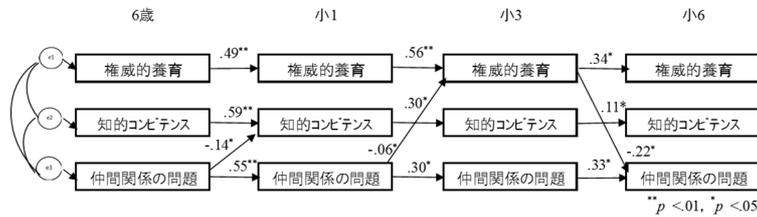


図3 仲間関係の問題と知的コンピテンスおよび権威的養育との相互影響関係

(2) 社会情動的スキルと認知的スキルの関連：横断的検討

それでは、ROCFにより評価した認知的スキルは、社会情動的スキルや知的コンピテンスとどう関連するのか。社会情動的スキルの各変数との関連については(表2) 小学1-2年生では「直後再生による図形の有無と正確さ」が、向社会的な行動や仲間コンピテンスとの間に有意な負の相関を示し、「効率性」が仲間関係の問題との間で性の相関を示していた。そのため、小学1年時点では、記憶や実行機能の高さが社会情動的スキルのポジティブな面を低めるように関わり、ネガティブな面を高めるように関わることを示唆された。一方、小学6年生では、「遅延再生による図形の有無と正確さ」や「模写時の断片化の低さ」が仲間関係の問題との間に有意な負相関を示しており、記憶や実行機能の高さが社会情動的スキルにおけるネガティブな面の低さと関わっていた。本研究の結果は、限られた変数間の関連を示すに留まる。しかし、記憶や実行機能のような認知的スキルの高さは、低年齢の頃では社会情動的スキルの低さに関わる可能性があり、そのスキルを対人関係でうまく活用する経験を積むことで、加齢に伴い社会情動的スキルの高さにつながっていくのかもしれない。また、知的コンピテンスとの間では(表2) 小学4-5年生において「効率性」との間に正相関が、小学6年生では「遅延再生による図形の有無と正確さ」との間に正相関が見られた。このことから、小学高学年になると、記憶や実行機能が知的コンピテンスを支える要因になることが示唆される。

表2 ROCF項目と社会情動的スキルおよび知的コンピテンスとの関連

	向社会的な行動			仲間コンピテンス			仲間関係の問題			知的コンピテンス		
	小1-2 (n=40)	小4-5 (n=32)	小6 (n=56)	小1-2 (n=40)	小4-5 (n=32)	小6 (n=56)	小1-2 (n=40)	小4-5 (n=32)	小6 (n=56)	小1-2 (n=39)	小4-5 (n=32)	小6 (n=51)
模写による図形の有無と正確さ	-.25	.08	-.04	-.25	-.08	-.09	-.04	.19	-.12	.19	.24	.02
直後再生による図形の有無と正確さ	-.36*	.13	.14	-.36*	-.27	.01	.04	-.09	-.23	-.13	-.04	.22
遅延再生による図形の有無と正確さ	-.23	.26	-.02	-.23	-.25	.04	.04	-.11	-.31*	-.19	.06	.28*
効率性	-.18	-.16	.07	-.18	.05	-.06	.36*	.16	-.26	.09	.34*	-.11
模写時の断片化の低さ	-.01	-.22	.08	-.01	.03	-.03	-.03	.06	-.34**	-.01	.27	-.01
模写時の計画性	-.29	-.03	.01	-.29	.05	-.05	.15	.08	.00	.11	.23	-.18

\*p < .05, \*\*p < .01

(4) まとめ

以上から、本研究では幼児期から児童期にかけての社会情動的スキルと認知的スキルとの相互影響的な発達メカニズムを解明するべく、2つの縦断コホートデータを用いて検討した。その結果、当該の期間では、先行研究で示されてきた先行する社会情動的スキルが後の認知的スキルに影響する方向性ばかりでなく反対の影響方向が見られる可能性があること、また社会情動的スキルの質がポジティブかネガティブかによっても両スキル間の影響の方向性が異なることを示すことができた。また、記憶力や実行機能といった認知的スキルと社会情動的スキルの関連は学年により異なり、低学年では社会情動的スキルの低下させる方向で関わる可能性が示され、今後は、社会情動的スキルと認知的スキルの両者の関連を媒介・調整する要因を含めたモデルでの検討が必要である。本縦断研究は継続中であることから、今後は対象者数を追加し、両スキルと関連変数を含めた縦断データからの検討を進めて行く予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計19件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 10件）

1. 著者名 細川美幸・眞榮城和美・梅崎高行・酒井厚	4. 巻 17
2. 論文標題 就学移行期の子どもの発達を支えるもの アンカーポイントの視点と子どものQOLの発達に着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 西南学院大学人間科学論集	6. 最初と最後の頁 49-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 渡辺誓司・酒井厚	4. 巻 65
2. 論文標題 コロナ禍前後の中学・高校生の追跡調査にみる家庭におけるデジタル学習とその可能性	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 NHK放送文化研究所年報	6. 最初と最後の頁 57-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 梅崎高行・北村勝朗・中山雅雄・杉山佳生	4. 巻 44
2. 論文標題 実行機能と選手評価の関連 フットサル競技における検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 健康科学	6. 最初と最後の頁 95-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15017/4773212	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高橋英児	4. 巻 755
2. 論文標題 コロナ禍の学校づくり・生活指導の課題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 生活指導	6. 最初と最後の頁 6-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 酒井厚・室橋弘人・菅原ますみ・松本聡子・相澤仁	4. 巻 28
2. 論文標題 小中学生における親友関係の質と情緒の問題との関連	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 パーソナリティ研究	6. 最初と最後の頁 221-232
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.2132/personality.28.3.10	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 梅崎高行・酒井厚・眞榮城和美・室橋弘人	4. 巻 47
2. 論文標題 児童期におけるサッカーのコンピテンスと向社会的の相互影響性 家庭の養育態度の差異を踏まえた縦断的検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 スポーツ心理学研究	6. 最初と最後の頁 75-87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4146/jjpsopsy.2020-1909	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 酒井厚・江川伊織・菅原ますみ・松本聡子・相澤仁	4. 巻 90
2. 論文標題 児童・思春期の親子関係と外在化型問題行動の関連に対する親友関係の調整効果	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 心理学研究	6. 最初と最後の頁 11 - 12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4992/jjpsy.90.17053	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 梅崎高行・酒井厚・則定百合子・眞榮城和美・田仲由佳・前川浩子・酒井彩子・松本聡子・高橋英児・室橋弘人	4. 巻 10
2. 論文標題 約束不履行に対する年中児の疑問的態度：家庭での約束事と気質の関連	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 子育て研究	6. 最初と最後の頁 3 - 14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋英児	4. 巻 744
2. 論文標題 適応型学級づくり・学級集団づくりと教育のスタンダード化(2)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 生活指導	6. 最初と最後の頁 54 - 61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件(うち招待講演 0件/うち国際学会 3件)

1. 発表者名 眞榮城和美・梅崎高行・酒井彩子・前川浩子・酒井厚
2. 発表標題 子ども期の社会性の発達に関する縦断研究プロジェクト(19) 幼児の知的コンピテンスの発達と母親の全体的自己価値感との関連を中心として
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 眞榮城和美・酒井厚・梅崎高行・細川美幸・渡辺弥生
2. 発表標題 就学移行期における子どもの発達と適応：生態学的システム理論に基づく観点からの検討
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会(関西学院大学)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 青年移行期のスポーツの自律的動機づけに関わる養育者の影響：仲間の動機づけ雰囲気との相互作用
2. 発表標題 青年移行期のスポーツの自律的動機づけに関わる養育者の影響：仲間の動機づけ雰囲気との相互作用
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会(関西学院大学)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 酒井厚
2. 発表標題 友だち関係を科学する 発達心理学からの視点
3. 学会等名 日本子ども学会第16回子ども学会議（首都大学東京）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Sakai, A., Maeshiro, K., Umezaki, T., Murohashi, H. & Maekawa, H.
2. 発表標題 Developmental changes and correlates of prosocial behavior among preschool years: A Japanese longitudinal study 1.
3. 学会等名 European conference on developmental psychology 19th Annual Meeting (Athens, Greece) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 眞榮城和美・村松志野・松本聡子・瀬尾知子・菅原ますみ・榊原洋一
2. 発表標題 就学移行期における子どもの自尊感情と母親の自尊感情との関連
3. 学会等名 日本子ども学会第16回子ども学会議（首都大学東京）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 眞榮城和美・鈴木智裕・やたみほ・石坂浩・宮本信也・高橋英児
2. 発表標題 学校から見る子ども同士の世界
3. 学会等名 日本子ども学会第16回子ども学会議（首都大学東京）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Maeshiro, K., Murohashi, H., Umezaki, T., Sakai, A., Tanaka, Y., & Sakai A.
2. 発表標題 The relationship between children's competence and mother's global self-worth: A Japanese longitudinal study 3.
3. 学会等名 European conference on developmental psychology 19th Annual Meeting (Athens, Greece) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Umezaki, T., Maeshiro, K., Norisada, Y., Takahashi, E., & Sakai, A.
2. 発表標題 Correlations between physical exercise and problem-solving strategies in interpersonal conflict settings: A Japanese longitudinal study 2.
3. 学会等名 European conference on developmental psychology 19th Annual Meeting (Athens, Greece) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 梅崎高行・酒井厚・眞榮城和美・室橋弘人
2. 発表標題 児童期におけるスポーツコンピテンスとペアレンティング 短期縦断データを用いた相互影響分析
3. 学会等名 第17回スポーツ動機づけ研究会(神奈川)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計10件

1. 著者名 酒井厚・舟橋敬一(編)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 285
3. 書名 シリーズみんなで育てる家庭養護第3巻 里親・ファミリーホーム・養子縁組アセスメントと養育・家庭復帰プランニング	

〔産業財産権〕

〔その他〕

PEERS Website  
<https://peersproject.info/>  
 東京都立大学教員紹介  
<https://www.tmu.ac.jp/stafflist/data/sa/11534.html>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	眞榮城 和美  (Maeshiro Kazumi)  (70365823)	白百合女子大学・人間総合学部・准教授    (32627)	
研究分担者	梅崎 高行  (Umezaki Takayuki)  (00350439)	甲南女子大学・人間科学部・教授    (34507)	
研究分担者	高橋 英児  (Takahashi Eiji)  (40324173)	山梨大学・大学院総合研究部・教授    (13501)	
研究分担者	室橋 弘人  (Murohashi Hiroto)  (20409585)	金沢学院大学・文学部・講師    (33305)	
研究分担者	細川 美幸  (Hosokawa Miyuki)  (20724321)	西南学院大学・人間科学部・講師    (37105)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	前川 浩子  (Maekawa Hiroko)  (10434474)	金沢学院大学・文学部・教授     (33305)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関